

2022年9月25日(日)

老球の細道691号

### 第59回県高等学校バスケットボール選手権会津地区大会観戦雑感

会津バスケットボール協会 室井 富仁

昔話の中の爺さんは山に芝刈りに行くのが通説であるが、敬老の日を迎えた私は近所に虫捕りへ行く毎日から体育館へバスケットボールを観戦に行くことができた。虫を採ることよりシュートで得点を採ることのほうが、やはり私の性に合っていて血は騒ぐ。

今回のウインターカップ予選は、3年生がインターハイ予選で「引退ハイ」になって新人に移行しているチームがどれだけ仕上がっているか、また3年生が最後までバスケットを楽しんで残っているチームが春からどれだけ進化しているのかを見ることが楽しみだった。

閉会式の挨拶でも述べたが、今大会二つのことが特に印象に残った。

一つはゲーム終了間際の残り数秒における攻防の駆け引きをどうするかであった。まるで自分がゲームを指揮するかのような錯覚に陥り、非常に勉強になった。

接戦のゲームは見ている方も面白いが、プレイしている方はもっと面白いだろう。ゲームとは勝つか負けるか最後までわからない緊迫した戦いに魂は揺さぶられる。その中でこそ勝っても負けても学ぶことは大である。接戦になると緊張して実力を発揮できない選手がたまにいるが、そういう選手には「接戦のゲームこそバスケットを最高に楽しめるよ」とよく選手に話したものである。あせってなどいてはもったいない。

何事も二度あることは三度ある。ゲーム終了残り数秒、1～3点差、チームファールは3回または4回以上、サイドラインまたはエンドラインスローイン等の色々なシチュエーションを想定して、それに対する攻防の準備を常におきたいものである。

「準備を怠ることは、負けるための準備をしているようなものである」(B・ナイト)

もう一つ気づいたことは「番狂わせの3原則」を忘れていたチームが多かったことである。わが会津地区は現在常に番狂わせを起こす気概を持ってゲームに臨まなければならない実力ランキングにいる。地区大会からその原則を忘れては県大会もまた番狂わせは無理。

①ディフェンスリバウンド：バスケットボールのゲームは基本的に両チーム共同攻撃回数が与えられる。相手にオフェンスリバウンドを取られればセカンドショット、サードショットで相手の攻撃回数が多くなる。当然得点が多くなる。スクリーンアウトあるのみ。

②トランジションディフェンス：バスケットボールのゲームは5：5の同人数の戦いである。相手の速攻に対して戻りが遅くなると2：1、3：2等簡単に得点される場面ができてしまう。ボールラインまで必死になって戻らない選手を少しでも減らすことである。

③チームワーク：1人で勝てない時は皆で力を合わせる。1本の指は弱いけどこぶしになると強い。「こぶしの原理」である。まとめるのがコミュニケーション。「大きな声で、誰よりも早く、ひんぱんに」コミュニケーションの3原則である。

地元の小学生、中学生選手、コーチ達が理想のバスケットボールを求めて会津地区の高校大会に足を運ぶ人が増えるまで「敬老の日」のイベントには参加できない。